

伊東静雄の故郷 川副国基

詩人伊東静雄はわたしと同郷であり中学校でも同窓であった。ただし『伊東静雄全集』（人文書院版）の年譜でわたしより一年以上級としてあるのはまちがいで二年上級であった。

詩人としての伊東静雄については大阪の詩人小高根二郎氏の最近刊『詩人その生涯と運命』（新潮社）がいちばんこまかに追求している。これほど緻密に理解深くやってもらえたいのは伊東の幸福である。ここでは伊東が生まれ育ったその郷里諫早いさはやと中学時代の環境とについてすこし記しておこう。

いまの諫早市の名前は世間が割合いにこれを知っている。それは伊東の郷里だということよりも、数年前に死者数百名を出した大洪水のあった町だということであるようだ。この立正女子短大の原子朗先生もこの諫早の出身で詩人伊東の流れを汲んでおられるわけだと思う。

長崎県というのは東を有明海、南を千々石湾、西を東支那

海、北を日本海にかこまれ、まんなかに大村湾を抱いた、細い枝葉のような半島からなりたっており、その半島は多良岳たらだけや雲仙岳うんぜんたけのような高峻な山と、その麓の丘陵からできていゝる。諫早はこの県のほぼ中心点であり、県内ではいちばんひろい平野を擁して交通の要点であり、農産物の集散地として聞えていた。天正一五年（一五八六）、諫早家晴がこの地に初代諫早藩主としてのぞんだが、二代目の直孝なおひさのときから、隣藩佐賀鍋島の強大な勢力下に屈してその支藩しはんのようなかたちになされ、ながい間庄政に苦しめられてきた。一六代目の藩主一学いっがくのときに明治維新を迎え廃藩となり男爵を賜わった。通称老万石の小藩であった。

諫早の郷土史をひもどくと、明治まではずっとながく佐賀藩からの庄迫の歴史である。領地は借り上げられ物資は取奪され、泣寝入りの時代が続くのである。寛延三年（一七五〇）

に佐賀藩に反抗する百姓一揆もおこっているが簡単に屈服させている。したがってこの土地の空気はながく無気力なものであった。退嬰的、保守的、保身的ということばが当るであろう。長いものには巻かれる式の、あるいは事大主義の、もっとも悪い意味の封建的な風習が、わたしどもの少年のころまでこの土地の空気を暗くしていた。

こうした土地から傑出したというほどの人物が出ようはずはない。小実業家程度に成功した者は幾人かあって、これらの小資本家階級を重んずることはあっても、金に縁の遠い学問・芸術の土を尊ぶという気風は見られなかった。わずかに漢詩人野口寧齋（慶応三年～明治三八年）がこの土地出身の学芸の土として名をなしたにとどまる。はやく「謫天情仙」の名で鵬外作『舞姫』の批評でも知られ、国分青厓らとともに明治漢詩界の鬼才と謳われ、のちに『太陽』や『一六新聞』の、漢詩による創作月評で世の注目を浴びたこの詩人についても、この土地で詳しくは知る人もない。もっとも寧齋の場合はその家に伝わりとされた病疾のゆえに文学辞典などにもその出生は「肥前の人」と記されているだけである。この寧齋にしてもこの土地に住んで名をなしたわけではない。かれははやく儒者であった父松陽につれられて上京し、そこで自己伸長をとげたのであった。

こうした土地柄のなかでそのまま文芸の士がすぐれた精神

形成をとげることはむずかしかったのではないか。寧齋ほどには知名でなくとも他にもまだ二、三の士がこの土地の出身者として学芸界にその後ないではない。しかしかれらのほとんどがはやくこの固陋な郷里を出でて他郷で伸長をとげているのである。感性の上では生れ故郷のこの地を死ぬほどに愛しながら、しかも理性の上ではこの土地の気風をきびしく拒否せねばならぬという二律背反のなかにかれらの自己形成はとげられたと見られる。わたしは寧齋のあと、伊東静雄の上にも強いこの悲しみを見るのである。

しかし諫早の風光そのものはすぐれている。北に峻嶮な多良岳たらだけがながい裾をひいて聳え、南東には雲仙岳が富士の山容をしのばせる秀麗さで屹立している。この両岳の間の盆地が諫早の町なのである。多良岳に源を発する本明川はこの県内でのいちばん長い河流として町の中心を流れている。この川がしばしば狂暴に氾濫して、多くの人命を奪ってきたのである。伊東の詩集『春のいそぎ』のなかの「なれとわれ」に、「いまははや 汝が傍らの 童さび愛しきものに わが指していふ なつかしき山と河の名」とあるその「なつかしき山と河」とはこれらの山川をさすのである。本明川はさらに遠く曲折して諫早平野のなかを有明海へ注いでいく。湖面と見まがう静かな有明海、（伊東の詩集『わがひとに與ふる哀歌』のなかに「有明海の思ひ出」と題する詩がある）その彼

方には晴れた日には阿蘇の連山も浮ぶのである。伊東は友人への書簡に故郷の風光の美しさを自慢そうに記しているが、伊東の詩魂を養ったものにこの諫早の美しい自然美があったことをわたしは疑わない。

伊東の生家は諫早の町から雲仙岳の方へ続く道が町を出はずれるあたり、ひやあまし這松下とよばれるところにあった。わたしの家は町の北にあり、伊東の家は町の南東のはずれにあったので小学校はちがっていた。しかし伊東が心を寄せた酒井百合子さんはたしか一時わたしの小学校の一・二級下におられたことがあるように思う。

わたしたちが小学校を卒業したころまだ諫早の町には県立の中学校はなかった。わたしたちは汽車で北へ二十分もかかる隣りの大村町の中学校へ通学しなければならなかった。この県立の大村中学校に入学してはじめてわたしは二年上級の汽車通学仲間に伊東静雄を知ったのである。わたしが中学校へ入ったのは大正一〇年であった。

大村というところは旧幕時代から藩主に英明な人が多かったこともあって金銭よりも学芸を重んずる土地柄であった。キリシタン大名として知られた藩公もあつたし、また幕末の藩の動向から廃藩後、おなじ小藩でも藩主は伯爵を賜わっている。長興又郎、善郎兄弟、長岡半太郎、楠本長三郎、荒木十畝らの学芸の士を輩出させたところである。真珠を養う澄

んだ大村湾にのぞみ諫早とはまたちがって風光の明媚なところであった。

諫早からの汽車通学の中学生は多いときは百名以上もあつたであろう。大村中学校全生徒の四分の一ぐらいを占めたかもしれない。学校ではおのずから大村の土地の生徒と諫早からの汽車通学の生徒との間に勉強の上にもはげしい競争意識が生じていた。よく出来る生徒が諫早組に多かったが伊東もそのよく出来る生徒のひとりであった。伊東は大村中学校で、進取の気風に充ちた学芸を尊ぶその学風にきつと触発されるころが多かつたと思う。そこではいわゆる諫早的な卑俗なものが排撃されたからである。わたしなども大村という土地の精神主義的なところに大分影響されたところがある。

伊東はしかし、中学時代は、ただ勤勉な勉強家・努力家であつた。中学校には文芸部というものがあつてそこから年一回『くわ攻城』という文芸誌、学報誌みたいなものを出していた。わたしの三年上級の福田清人氏、また二年上級の蒲池飲一氏などとともにわたしもその部の委員となつてなにか書いて発表したものだが、伊東は当時そういうものには一切関心を示さなかつた。文学好きなどというけわいは微塵もなかつたといつていい。汽車のなかでも他人に話しかけもしないでひとり英語の単語を覚えているような中学生であつた。土曜には授業がきつちり一二時に終るのだが、中学校から大村

の駅までは二キロもあった。諫早ゆきの一二時九分の汽車に乗るために、伊東は授業が終ると肩からつり下げた大きな鞆を脇にかかえこんでまっしぐらにかけ出していく。一汽車でもはやく帰って勉強をしたかったのであろう。

伊東の家はそれほど豊かでもなかったらしいし、きょうだいいも多かった。重い一家の責任が秀才息子伊東の双肩にかかっていたようである。おそらくその青春を圧殺して伊東は家のために孤独な勉強をしていたのだと思う。

伊東は中学の四年から佐賀の高等学校にはいり、そこから京都大学の国文科へ進んだ。とにかく秀才であった。京都大学の三年生の伊東と夏休みに諫早で逢ったことがある。昭和三年の八月だ。伊東は卒業論文に正岡子規を書いていていい、どこか意気あがった、昂然としたところがあった。無精ひげをきたなくのばしたままの、にきびのいっぱい吹き出た青い顔をしていたが、中学時代とはちがって、なにか期するところありげであった。自己の裡にある稀有なものをごこれからはじめてしだいに外へ押し出して行こうとする若い日の伊東の姿勢であったわけである。

研究室たより

◇文芸科の研究室は、いつも賑やかで活気にあふれている、というのが大方の印象のようです。講師の先生方も講師室へは行かず、殆んど研究室をお使いになるので、電話が鳴ったり、学生が忙しく出入りしたりするときは先生方に対してひどく恐縮する時も少なくありません。

◇図書閲覧コーナーは小人数のゼミにも使われるので、常時学生の出入りも自由なのですが、図書や資料の利用に來たのが、つい賑やかなおしゃべりの場になってしまう時も多いようです、心ある学生が、その黒板に「ここは研究室です」と、研究の二字に傍点を打って大書してくれました。

◇有名な詩人や作家、評論家をはじめ、俳優や芸能人、出版社放送関係の方もよく研究室に見えて、そんなとき、しばし和やかな談笑がつづくのですが、だからといって、いつも賑やかなばかりではなく、とくに学生の姿も少なくなる午後遅くから、漸く本来の研究室らしい静かな熱気がこもりはじめるのです。非常にしばしば、夜遅くまで文芸研究室からスタンドの灯がもれているのを、ご存じでしょうか。

◇先週は土井先生の講座のために俳優の岡田真澄さんが見えましたが、まじめな人柄や生きたマスコミ論に、学生たちは認識を改めたようです。岡田さん個人に対してだけでなく、「タレント」というものに対して。木島則夫さんや栗原玲児さんの場合もそうでしたが……。また最近では作家の由起しげ子さんのお人柄に、研究室で感動しました。檀一雄さんが実はヒューマニストであられることもこの研究室で知りました。

(笹)